

書評

野間秀樹著

『ハンゲルの誕生 音から文字を創る』

(平凡社 二〇一〇年五月)

辻 星 児

朝鮮語の初級学習書は世にあふれ、ハンゲルという言葉も日本にすっかりなじんではいるものの、ハンゲルについて、これを言語学的な視点から、その魅力と価値を一般向けに述べたものは皆無といってよい。本書は、一般向けの新書として書かれたものではあるが、言語学の視点のみならず普遍的な視点からハンゲルの成立と歴史、その知の世界における意味について論じたものである。しかもハンゲルに対する著者のあふれる情熱と思想が全編にみなぎり、読者を飽きさせず、心躍らせながら読ませていくだけの内容、構成そして文体がそなわっている。著者、野間秀樹氏は、朝鮮語学・言語学、韓国語教育など多くの分野での業績があり、視野の広い研究者として評価の高い言語学者である。研究者は、自らの

研究の成果と意思を学界だけに閉じ込めることなく、それを一般の人々にも分かりやすい形で提供し、社会的還元を図ることも大きな任務の一つである。さまざまな事情からそれが難しいことが多いのが現実であるが、本書はそれがうまく成功した稀有な例でもある。

本書の構成を概観する。本編は、序章「ハンゲルの素描」以降、次の7章から構成され、終章「普遍への契機としての〈訓民正音〉」で終わっている。よく練られた構成である。

第1章 ハンゲルと言語をめぐって

第2章 〈正音〉誕生の磁場

第3章 〈正音〉の仕掛け

野間秀樹著『ハンゲルの誕生 音から文字を創る』(辻)

- 第4章 〈正音〉 エクリチュール革命——ハングルの誕生
第5章 〈正音〉 エクリチュールの創出
第6章 〈正音〉——ゲシュタルト(かたち)の変革
第7章 〈正音〉から(ハングル)へ

第1章では、ハングルの名称や(音声)言語と文字との関係を確認しつつ、朝鮮語の構造や語彙の特徴などを概観する。文字を考える際に必須となる前提が示される。

第2章では、ハングル以前の時代における文字使用という観点から、漢字とその使い方(訓読など)について述べられている。

まず、ハングル以前の時代には漢字が唯一の「知」であった点から、漢字の特徴が文字論の視点から論じられる。漢字の六書が形音義のうちの形・義と音・義の変容(自己増殖)であるのに対し、訓読みや訓読は、形・音の上でおこった画期的な自己増殖であるとする。そして、訓読とは何かを問いつけ、それは、つまり古典中国語に他言語を重層的に重ねることにより、言語差を析出させつつ言語空間をワープする営みであるとする。さらに訓読については、朝鮮の口訣が詳しく述べられ、角筆による点吐釈読口訣の発見や吏読・郷札にまで解説が及ぶ。また、文字を扱う場合には、それを単に記号としてではなく、質量をもったテクストとして扱ってはじ

単位(音素に対応)の設定、その前提となる初声、中声、終声といった音節構造分析が示される。これは当時、すでに正音創製者たちの分析が現代の音韻論的分析と同じ水準にあったとする。また、(子音)字母の形は音声器官の象形に求められたが、著者はこのことの重要性を指摘する。つまり、「かたち」に音が立ち現れる、いわば究極の表音性を求めたことである。さらに激音字母などの加画は、現代の音韻論でいう「弁別の特徴」をも取り入れていることの指摘もある。ついで母音字母の生成が性理学、陰陽五行説で理論武装されつつ、音声学的な調音的位置や母音調和に基づくものであることが解説される。そして、この字母が組み合わされるとき、音節単位でまとめられるという点にとくに注目し、正音は、音素の平面と音節平面を階層化し統合する「単音||音節文字」であることが主張される。またさらに、正音は平上去(入)(声調)という「超分節的音素」まで「かたち」(傍点)にするという分析の徹底性を示している。これは、当時、音節の分析において、初声、中声、終声および声調という4分法に立っていたことを示すものであり、それは、15世紀中国の音韻学を凌駕し、20世紀の言語学の水準に匹敵するほどだとする。最後に、形態素間の表記にあたって、正音は、①音韻論的表記、②音節構造論的表記(伝統的に音韻論的表記とされているもの)、③形態音韻論的表記(現代語表記に代表

野間秀樹著『ハングルの誕生 音から文字を創る』(辻)

めて十全の理解が得られるとする。最後に、ハングル以前のアジアに伝播した単音文字にもふれ、それらがハングルとは異なり、子音字母中心の線的なものであったことを確認する。本章は、ハングルの成立とその特徴を知るためには欠かせない漢字や訓読のメカニズムにまつわる問題が著者独自の視点もおり込みながら論じられる。レイヤーを重ねて読むという著者の訓読観は面白い。また、「読む」という観点から、テクストを単に「記号論的平面」にとどめず、人間とのかわりのなかで考えていこうという著者の態度は共感もてる。本書では、アジアの諸文字についての記述が少し簡単なきらいはあるが、アジアの諸文字がハングルの誕生にどのようにかかわったかは重要なことである。ハングルの創製者たちは、漢字以外のアジアの諸文字も知っていたであろうし、その特質を引き継いだ面もある。もちろん、いっぽうで、著者も言うように、ハングルが他文字には見られない特質をもっていることも確かである。

第3章では、漢字と訣別した世宗たちが、いかに音から文字—ハングルつまり正音—を創っていったか、すなわち音を「かたち(ゲシュタルト)」にしようとする世宗たちの思想をいわば追体験的に明らかにしていき、その言語学的水準の高さを論証していく。

まず正音(以下本書にしたがって「正音」とする)の字母

という3層構造をもつ動的システムであると捉える。そして③は表語的でもあることから正音は表語文字に回帰しており、表語文字から表音字母へ、そこから表語文字へという「輪廻」が見られるという。

ハングルの研究は汗牛充棟を呈しており、本章で述べられている事実そのものは、多くは知られていることであろう。しかし、ここで著者は、音やことばが文字になるというのは、そう簡単なことではない、実はそれは驚嘆すべき稀有なできごとであるのだ、別の面から言えば、正音の創製者たちの稀有な才能と驚くべき思想、そして理論化と執念、さらには知の状況をこの「訓民正音」に読み取ることができるのだということを強く主張する。これは、全くそのとおりである。世界の大多数の文字の系統がアルファベットか漢字かであることを見れば、独自の文字を創ることは奇跡的なことである。しかし、いっぽうで、ゼロの知識から新たな文字を創ることも不可能に近い。ハングルの創製にあたって、中国音韻学の力は絶大ものがあつたことは否めない。例えば、音節分析にしても、中国には声調や声母・韻母といった概念はもちろん、韻尾(つまり終声)、韻腹(つまり中声)といった概念も古くからあつた(いつからこういう術語自体が使われたかは知らないが)。また、音素分析も中国音韻学の原理から言えば、ある程度可能であつた(当時まず朝鮮漢字音の整理が

行われたと推定され、それが『東国正韻』となる。しかし、中国音韻学を知っていたハングルの創製者たちも、朝鮮語の分析をとおして、最終的に全ての音単位を析出し、システムとして、それに「かたち」を与え、しかも音節という単位を重ねるという原理は、著者もいうように、「奇跡」的といえるだろう。結果的にみれば、ハングルはいわゆる単音文字であり、ローマンアルファベットなどと同じ範疇に入るが、その成立をみれば大きく異なることが分かる。なおハングル表記の表語性について付言すれば、河野六郎博士が喝破されたように、文字の言語学的機能は表語にある。ハングルの創製者たちは、まず語あるいは形態素を認定・抽出し、それをもとに文字の創製を行ったのであろう。また、傍点は「音節構造論的表記」に表語性を付与するための手段でもあったらう。

第4章では、正音に対する崔萬理たちの反対上疏文、『訓民正音』解例本の序文、書き言葉としての文体創出のための「諺解」などが述べられる。著者は、ハングル創製を「革命」として捉え、その思想と実践を明らかにしつつ、漢字・漢文主義の反革命派との熾烈な闘争の展開を述べる。ここで、著者はエクリチュール(「書くこと」など)という術語を導入し、当時を支配していた漢字漢文の世界に正音を打ち立てることを「正音エクリチュール革命」と名付ける。世宗を中心

としたこの正音主義者たちに対し、崔萬理たちは反対上疏文を突きつけるのであるが、著者は、これを単なる事大主義として切り捨てず、むしろそこに正統派としての「漢字漢文原理主義」をみとめ、また、その思想が言語学的、文字論的基盤を持つていることに注目する。すなわち、正音という無機的な表音文字(用音合字)は、漢字という生きた細胞からなる知を崩壊させるという論である。当時にあったのは、この「漢字漢文原理主義」こそが正統派であり、「正音エクリチュール革命」派はむしろ異端であったという捉え方である。この正統と異端との闘争は異端革命派の勝利に帰結することはいうまでもない。『訓民正音』解例本の序文はこの革命の理論武装書であり、革命宣言であるとする。正音は、漢字漢文が書き得なかつた朝鮮語のオノマトペまでも書きうる文字、全てを「知」の世界に取り込める文字であると。さらに、このような革命的文字も、すぐさま文や文章というテキストとなるわけではない。書き言葉という文体が創出されなければならぬ。そのために「諺解」という「正音エクリチュール」が誕生する。その嚆矢として『訓民正音』『龍飛御天歌』があったとする。

著者の「正音エクリチュール革命」という観点は大変面白いし、これが、いわば本書のキーワードにもなっている。そして、たしかに当時の言語状況を考えれば、「革命派」を「異字」となっていくことが示される。また、そこに書かれることは、固有語と漢字・漢文的要素が「二重螺旋構造のごとく絡み合」い、現在にまで至っているが、このような文体は諺解が契機になったのではないかという指摘もされている。最後に、燕山君の「正音禁庄」にも触れたあと、朝鮮半島におけるエクリチュールにおいて正音はいかなる位置を占めてきたのかを問い、その位置の重要性が確認される。

正音を使った文献の解説は一般の読者にも分かりやすく、興味を持てる。なお、本章では触れていないが、訳学書も正音ならではの使用例であるし、世宗と訳学との関係には深いものがある。また、余談であるが、外国資料には、ときにハングルの使用についての記述がある。例えば、ハメルの『朝鮮幽囚記』には、ハングルが一般の人々に用いられ、あらゆる事物や聞いたことのない名称を漢字よりたやすくかつよりよく書き表せる文字であるという記述がある。また雨森芳洲が関与したかとされる『交隣須知』には、次のような文例が見られ、ハングルに対する当時の人々の思いを見ることができ(苗代川本31-34b)。

諺文언문은 키고 시븐말을 다 쓰리矣合例

ヨンモンハ云タイトヲモフコトバヲミナカイトヨウコサナル

第6章では、「かたち」(ゲシュタルト)から見た正音を考える。正音の「かたち」は、伝統的な漢字がもつ書的美や精

【と捉えるのも首肯できる。あまりに図式化するのは問題であろうが、逆に図式化することで論点が明確に見えてくる面もある。もう一つ、気になるのは、これだけの強烈な革命意識を支え、突き動かしていた力、動機は一体何であったのだろうか。正音創製の動機については、民族の自覚や二重言語状態の桎梏(本書でも言及はある)、政治・行政・外交の円滑化など、すでにさまざまな言説はある。本書でも、もう少し明確に触れてほしいところもある。なお、たとえ「無文字」社会であっても、書き言葉的な話し言葉は存在するものである。文字が導入されてはじめて、ゼロから書き言葉という文体が創られるというものではなさそうである。】

なお、本書刊行の後、『訓民正音』(趙義成訳注 平凡社東洋文庫800(二〇一〇年一月))が刊行された。『訓民正音』解例本、「崔万理等諺文反对上疏文」、「東国正韻序」を収録し、現代語訳、訓読文、訳注に解説が付されている。それぞれの内容と全体が分かり、本書の理解を助ける。

第5章では、正音が普及していく過程が中世から近世の文献を中心に紹介される。正しい漢字音を示そうとした韻書の『東国正韻』から始まり、仏典、経書、民衆教化書、『千字文』、『杜詩諺解』、時調、国文小説や『春香伝』など、正音を用いたさまざまなジャンルの文献が図版とともに解説される。正音が思想、生活、文学などあらゆる面で使用され、人々の文

野間秀樹著『ハングルの誕生 音から文字を創る』(上)

神性に対する反逆であり、論理的・言語的な知を目指す新たな美の創造であるとする。しかし、筆遣いを拒否した書体も、筆に抛らざるを得ない以上、「身体性」を取り戻すこととなる。そして、その後、宮体という新たな美の様式が確立されていく。

本稿の筆者は、本章のような側面からハングルを捉えたところがなかったもので、いろいろ教えられるところがあった。たしかに、正音の幾何学的な「かたち」は、漢字がもつ伝統的書体に対する革命、反逆とみることもできる。さらにそれが伝統により、新たな美へと発展するという主張は面白い。こゝとばを考えると、言語の問題だけでなく、「かたち」も視野に入れる必要があることを教えてくれる。

第7章では、甲午更張以後の正音エクリチュールの闘争と発展が簡潔に述べられる。20世紀前半、正音はハングルという名称を獲得し、植民地時代の日本語と命を懸ける熾烈な闘いを繰りひろげつつ、解放後のハングル全盛時代に至る。いっぽう、ハングルの「かたち」や「書くこと」も、近代以降、西欧の活字印刷、タイプライター、コンピュータとテクノロジーの進化とともに、大きな変革を上げていることが示される。

そして終章は次のことばでしめくくられている。

〔訓民正音〕は……エクリチュールの奇跡である。ことばと

は何か、文字とは何か、人間にとって文字とは、エクリチュールとは、知とは何か、といった普遍へと導いてくれる、稀有なる奇跡である。〕

本書は、いわばハングルが秘めている「すざさ」を言語学的に、文字論的に、さらには人類の「知」という広い観点から一つ一つ具体的に論証し、解き明かしていったものである。著者独自の視点が全編をとおして明確であり、「読ませる」ための「仕掛け」が効果的に機能している。それにより、ハングルの奇跡的な「生い立ち」が「知」のドラマという形で躍動感をもって展開されている。そして、「正音エクリチュール」のさまざまな「革命」性は、我々現代人の「知」の世界にも現代的意味をもって迫ってくる。もちろん、その背景には、ハングルに対する著者の熱い思いとともに、言語学、朝鮮語学その他、多方面にわたる確実な専門性が本書の内容を支えていることは言うまでもない。著者が本書で用いている言語学の重要な用語は、どれも正確で分かりやすい。本書は朝鮮語学の入門としても使えそうである。また、さまざまな説明やハングルとの対比に、日本語の例が用いられているが、これは大変効果的である。仮名、漢字に見慣れた眼から、このハングルの生い立ちを見ることによって、ことばや文字に対する新たな思いが広がることは間違いない。著者の確実

な専門性もさることながら、いっぽうで、既成を疑い、その存在の基盤を問いつつ、ものごとを根源性に遡って考えていくという著者の姿勢は研究のあるべき姿、原点を見せてくれる。さらに、ことばをラングとしてだけではなく、言語生活、さらには人間の「知」や「生」という中で、生きた力として捉えていくという方向性は、ことばと人が織り成す無限の世界を指し示すものである(著者は、「言語存在論」を提唱する。参照:野間秀樹「現代朝鮮語研究の新たな視座〈言語はいかに在るか〉という問いから―言語研究と言語教育のために―」『朝鮮学報』212輯)。

本書には、読者に対するさまざまな心配りがなされている。巻末に付けられた「文献案内」と「文献一覧」は34頁に亘るもので、詳細かつ綿密である。同じく巻末8頁の「ハングル略年表」とともに、今後、専門的に勉強しようとする者にとっては大変ありがたい指針を提供するものである。さら

に索引は用語解説も兼ねており、「異音」、「異形態」、「母音調和」といった専門用語100項目以上に簡単な解説がほどこされており、便利である。本編での図や表も見やすく作られ、内容の理解に役立つ。また、本書には、注が一切ないのも、注参照の手間を省く、本書の編集方針であろう。もともと注に回したほうがよいような部分もなきにしもあらずではあるが。

本書は、ハングルの縦糸と横糸が織りなす知の世界とそのドラマをみごとに描き出し、多くの人々にハングルの真の面白さを実感させるとともに、ことば、人間そして歴史について考える契機を与えてくれる作品である。

なお、本書は、「第22回アジア・太平洋賞」の大賞を受賞した。すでに各種メディアでたくさんさんの書評、紹介がなされており、2万部に達するロングセラーになっていることも付け加えておく。

(岡山大学大学院教授)

朝鮮学会役員

総裁	参与	◎* 魯ゼウオン
顧問	会長	* 波田野節子
山田忠一	飯降政彦	* 濱田耕策
大久保昭教	副会長	* 広瀬貞三
植田平一	藤本幸夫	* 油谷幸利
橋本武人	松尾勇	* 吉田光男
有光教一	幹事長	* 六反田豊
梅田博之	藤田明良	海外編輯委員
大江孝男	幹事	鄭孝光
大谷森繁	* 東潮	張孝鉉
大村益夫	* 伊藤亜人	金東哲
金関良恕	* 岡山善一郎	
河北内弘	* 糟谷憲一	
北村秀良	◎* 岸田文隆	(事務囑託)
斎藤忠男	* 金善美	吉川俊子
武田幸男	* 白川豊	* 印は常任幹事・
西谷正雄	* 鈴木陽二	編輯委員
村山正節	* 田中俊明	◎印は会計監査
宮田節子	* 長森美信	
	* 野間秀樹	

朝鮮学報 第219輯

(平成23年度第1号)

平成23年4月10日 印刷

平成23年4月26日 発行

編集 朝鮮学会 代表者 飯降政彦

印刷 中村印刷株式会社 京都市南区上鳥羽薬田29

〒632-8510 奈良県天理市柚之内町1050 天理大学内

朝鮮学会

電話 天理(0743)-63-9060 振替 0990-8-10065

銀行名：(日本) 南都銀行・天理支店 (店番180)

THE NANTO BANK, LTD. TENRI BRANCH

口座番号：普通 30873

名義：朝鮮学会

朝鮮學報

第二百十九輯

平成二十三年四月

論 說

糟 谷 憲 一 「韓国併合」一〇〇年と朝鮮近代史…………… 1

鈴 木 開 丁応泰の変と朝鮮
——丁酉倭乱期における朝明関係の一局面—— …… 39

武 井 一 保護国韓国の在外国家機関の法的地位について
——東京での民族運動の拠点「留学生監督部」の
不可侵をめぐる—— …… 73

咸 苔 英 一九一〇年代の李光洙の登場とその意味
——『毎日申報』の路線との関係を中心に—— …… 115

宋 恵 媛 在日朝鮮人詩人姜舜論
——その生涯と詩作をめぐる—— …… 155

書 評

野間秀樹著『ハングルの誕生 音から文字を創る』：辻 星児 …… 201

彙 報

近着寄贈交換図書目録・会員消息…………… 209

朝 鮮 学 会

ISSN 0577-9766

CHOSEN GAKUHO
*Journal of the Academic Association
of Koreanology in Japan*

No. 219

April 2011

Articles

Kasuya Kenichi: A Century After the “Annexation of Korea” and
the Modern History of Korea…………… 1

Suzuki Kai: The Ding Ying-tai (丁応泰) Incident and the Joseon (朝鮮)
Dynasty—An Aspect of the Relationship Between the Joseon
Dynasty and the Ming Dynasty During the Jeongyu (丁酉) War—
…………… 39

Takei Hajime: The Legal Position of a Government Agency Abroad
in Protectorate Korea
——The Nonaggression of the *Ryugakusei Kantokubu*
as a Base for Racial Movements in Tokyo—— …… 73

Ham Tae-young: The Significance of Lee Gwang-soo in the 1910s
——A Focus on the Connection with the Policies of
the *Maeilshinbo*—— …… 115

Song Hye-won: The Zainichi (在日) Korean Poet Kang Soon (姜舜)
——An Introduction to His Life and Works—— …… 155

Book Review

Noma Hideki, ed., *The Birth of Hanguk*:
Creating Characters Through Sound (Tsuji Seiji) …… 201

Miscellanea

Titles of Books & Magazines Recently Received
Transitions of the Members…………… 209

Published by

CHOSEN GAKKAI

The Academic Association of Koreanology in Japan

Address : Tenri University